

月刊 岩小舎 4月号

■ 『岩小舎』が年報だったころ

～月刊 岩小舎の創刊に寄せた三代目編集長の寝言 / 講師:工藤寿人

『岩小舎』の名が月刊として再登場するというので、思わず古い『岩小舎』を引っ張りだして読みふけてしまった。おかげで中々原稿が進まない。第4号の会員名簿に自分の名を見つけて、1987年の9月に入会したんだっけと当時を思い出す。自分の書いた記録など発見して、青春?だナアーなどと嬉しくなってくる。

沢登りがしくて無名山塾に入会したのに、結構岩登りにはまっていたらしい。どうもきっかけは、はじめて参加した89年の剣合宿にあるようだ。当時の合宿は真砂沢ベース。金沢リーダーに先導され、C フェース～八峰上半部～剣本峰と辿り、記録を読むとベースに帰ったのは夜の8時。確かに剣沢の雪渓をヘッドランプで下りたことは憶えていたが、時間のことはほとんど気にしていなかった気がする。そんなに遅かったのかと驚いてしまう。文章を読み返してもかなりのハイテンションであったことが伺い知れる。他のメンバー(金沢リーダーを除く)も同様に、自分達しかいない剣の山頂で、西に傾きはじめた太陽を眺めてボーとするもの、感激の余り涙ぐむもの、「昨日までの自分とは違う」とクライマー宣言するひとなど、感動的?ながらもどこかアブナイ空気も!漂わせていたのだった。

ともあれこのままの勢いでというか、勢いあまって『岩小舎』6号の編集を引き受けてしまったのは合宿から帰った後だったような気がする。それから半年あまりの間、自分はあまり原稿も

書かないのに、ひたすら原稿を依頼し、念押しし、催促しまくりの日々。時には敬遠されることもあったなー。

こんなふうにして僕の無名山塾的生活が深まっていたのでした。

【今月の目次】

■ 『岩小舎』が年報だったころ	1
■ 技術委員会企画/八ヶ岳集中	
阿弥陀岳北稜	2
横岳石尊稜	2
ツルネ東稜～硫黄岳	3
硫黄岳～赤岳縦走	4
赤岳主稜	5
阿弥陀岳北稜	5
赤岳	7
■ 講習山行	
下権現堂山/山スキー	7
谷川岳天神尾根&雪洞	8
谷川岳西黒尾根&雪洞	9
阿弥陀南稜	9
谷川岳東尾根	11
■ 今月のTIPS	10
■ 同人便り	12
■ 自主山行	
巻機山/山スキー	12
平標山/山スキー	13
■ こちら技術委員会	14
■ 編集室だより&会員一言集	15
■ 3月の山行一覧	16
■ 5月号の予定	16

■技術委員会企画2004／春 八ヶ岳集中の記録（講習含む）

「」 3月27日(土) 「」

阿弥陀岳北稜

「」

- ◆メンバー：伊藤幸雄(L)、田口浩昭(SL)、福田洋子、山野昭人、山野美香
- ◆記録：田口浩昭

行者小屋で、身支度を整え出発。中岳沢をラッセルしながら少し登り、沢が開ける手前で尾根に上がり、ジャンクションピークに上がる手前でもがいていたら少し雪崩が起きた。ビックリした・・・？

皆は、冷静に見ていたようだ。

この先は、灌木帯の雪稜を行くと岩壁にでる。ハーケンが何本か打ってあるのが見える。簡単そうに見えるが、岩がベルグラになっていて滑る。

これを登ると、ナイフリッジを5mくらい渡る。また岩壁にでる、ここは、ビレイの支点ハーケンはあるが、他には何も無い。

あとは、急な雪稜を登れば山頂だ。

阿弥陀岳からの下山は、急な雪面を後ろ向きになってバックステップで中岳沢コルまで降りた。

そして、中岳沢を雪崩を起こさないように注意しながら静かに下り、文三郎尾根分岐にでた。

【行程】

美濃戸赤岳山荘駐車場(7:00)～行者小屋(10:20)着～(11:00)発～ジャンクションピーク(12:30)～阿弥陀岳山頂(15:00)

「」 3月28日(日) 「」

横岳 石尊稜

「」

- ◆メンバー：伊藤幸雄(L)、横川秀樹(SL)、田口浩昭
- ◆記録：伊藤幸雄

伊藤、田口両名は前日の阿弥陀北稜に続いての山行であるが、横川氏の前日は、苦手な接待ゴルフのお付き合いもあって、この山行にかける意気込みは相当なもののように感じた。

朝 6:20 赤岳鉱泉出発、石尊稜の取付に向かい意気揚々と出発したものの何故か中山尾根側に入り込んでしまい、余計なラッセルをしまして戻る破目になった。

戻ってみれば石尊稜まで綺麗なトレースがついているのではないかと、素直に来ればよかったと悔やんでしまうが、どうも3人も複雑に物事を考えすぎる傾向がある。

石尊稜取付き口 7:00、すでに先客が2～3パーティー入っており下部岩壁は順番待ち状態であった。この2～3日に雪が降ったせいか

岩は雪が着いて薄氷が張っている。

先行者も慎重に登っている様子で時間がかかっていた。我々は 45m、50mのザイル2本を結び合いリード横川、セカンド田口、サードを伊藤の順に登りはじめた。

途中、マナーの悪い後続パーティーが現れ、如何にも俺たちはバリエーションに慣れている様な口調で「こんな処は登ったらすぐ終わっちゃうよ・・・」とプレッシャーをかけてきた。あまり取り合ってもしょうがないので先に行かせ、我々のペースを守りながら、慎重に登ることにした。

そんな中、自分は最後尾に登りながら、「アックス1本と手で岩を掴みアイゼンの歯を慎重に乗せながら登る姿は2年前には到底考えられなかったな」とふと、この2年間の山塾を思い出

し、ちょっと感傷的になっている時を楽しんでいた。

ルートは下部岩壁を過ぎてから4ピッチで灌木帯を過ぎ、ナイフエッジの尾根や急登の草付小ピークがある長い雪稜を登って上部岩壁に取り付く。途中、ナイフエッジの尾根で Y 氏が足を滑らせてハッとさせたが、そこはしっかりと滑落停止を行い難なく通過していた。しかし、その後はちょっと気落ちした様子で喉はカラカラ状態で疲れがどっと出たようだ。

急登の小ピークの草付は私がリードしたが、そこは以外と手がかりが無く、また支点も全くないことからダブルアックスで(歯はミックス用)登ったが、ミックスの歯はよくくい込み安定して登れた。

一番苦勞していたのは、田口氏のようにアックスを使っただけの登りに慣れていないせいもあってか、精神的に疲れたようで「ああ～いやだ」の独り言が出ていたが、黙々と登りに専念している様子だった。

上部岩壁は横川氏がリード、そして稜線に繋

がる最後の登りは、年寄りに敬意を表してか、自分にリードを渡してくれました。

いい仲間ではあった。

14:40 石尊峰山頂に起つ・・・待ち時間もあって時間が計画よりもかかってしまったが充実した山行になった。

降りは地藏尾根～行者小屋～赤岳鉱泉～北沢経由、美濃戸口 18:00 着。

この山行には「おまけ」があり、疲れた体でやっと千葉の自宅に戻った T 氏だが、購入したばかりのアックス2本を美濃戸口駐車場に置き忘れた事に気づき、慌ててトンボ帰り？再度、自宅の門を叩いたのは朝方！

一人、特別山行をしてしまった様である。本당にご苦勞さまでした。

【行程】

赤岳鉱泉(6:20)～石尊稜取付口(7:00)～石尊峰山頂～(14:40)地藏尾根～赤岳鉱泉(16:00)～美濃戸口(18:00)

「」 3月27日(土)～28日(日)「」

ツルネ東稜～赤岳～横岳

「」

◆メンバー・記録：松本善行

「ツルネ東稜」は、八ヶ岳の東面、主に赤岳天狗尾根、権現岳東稜、旭岳東稜を登攀した際、或いはキレット縦走時のエスケープとしての下降ルートである。

ルート自体は確保が必要な岩場、雪壁もなく問題はないが、ルートファインディングは必要。また、数箇所雪のナイフリッジもあるので注意しなければならない。

(目的)・・・今回は特に積雪期単独バリエーションというこだわりを持って、あえて登りとして計画した。

(感想)・・・初日、取り付けからトレースなし。膝上のラッセルで、現時点では今期積雪期中、体力的に最も辛い山行。キレット稜線(ツルネの頭)までわずかに及ばず、2,530m付近の尾根上にて幕営。

夜、月がくっきりと映えて美しく、甲府方面の

夜景がすばらしかった。そして、自分以外人気のないこのキレット上と、鉱泉の賑わいとギャップに酔いしれていた(酒にも酔っていた m(_)_m)。

二日目は赤岳の岩稜帯まで再びラッセル。昨日の疲れがとれず、最後の硫黄岳の登りはバテバテであった。

【行程】

3月27日
清里美しの森(10:00)～出合小屋(11:40)～ツルネ 2,530m 付近(16:30)泊
3月28日
(5:40 発)～赤岳(8:20)～横岳(10:00)～硫黄岳(11:00)～赤岳鉱泉(11:40)

「」 3月28日(日)「」

硫黄岳～横岳～赤岳 縦走

- ◆メンバー：山野美香(L)、福田洋子、山野昭人
- ◆記録：山野昭人

赤岳鉱泉から硫黄岳まではすでに3度目であり、予定通り順調に進む。いよいよここから未知の領域だ。まずは硫黄岳頂上から、これから歩く稜線の全景を眺める。台座の頭へ伸びる稜線は意外な程平面が連なった平原で、南八ヶ岳の他の場所では見られない一種独特の雰囲気がある。これまでに目にはしていたのだろうが、自分の行く手として見ると少々不気味に思えた。

台座の頭を過ぎたあたりから稜線が細くなり、核心部に入ったことがはっきりとわかる。今年の南八ヶ岳の雪は、これまで踏んできた雪とは違って、とにかく崩れやすい。体重を乗せると崩れだすことが多々あり、つぼ足でも安心できなかった。気温が上がり始めるとダンゴにもなりやすく、ちょっと油断すると登山靴にずっしりとした重みを感じるようになる。ひどいときには高下駄を履いているような感じになったこともあった。この状況では急な斜面の下降やトラバースがかなり怖い。こまめにピッケルでアイゼンを叩いてダンゴを落としたが、一時的ではあるが斜面の真ん中で1点確保(片足立ち)になるのはなんとかならないものかと考えた。小岩峰を超えたり巻いたりしながら奥の院に近づく。相変わらず神経を使う雪面のトラバースが多い。もう少して奥の院というところで声をかけられた。見上げると松本さんが立っていた。登り返した松本さんと道標の近くでしばし歓談。ルートの様子や注意



点などの情報をいただいた。下を覗けば石尊稜を登っている3人組と思しきパーティーも見える。南八ヶ岳全体に無名山塾のメンバーが取り付いているようで、なんとなくうれしい気分になってくる。集中の楽しさの1つだ。

奥の院を越えたあたりから見覚えのある風景となった。昨年初頭の赤岳・硫黄岳の1日目、時間が早かったので、有志のみで横岳方面に1時間半ほど踏み込んだ際に歩いた所に入っていた。去年は半分くらいまで来ていたんだと納得した。

地藏仏で時間とにらめっこ。すでに本山行の課題もクリアーし、南八ヶ岳の主脈をつなぐことができたので地藏尾根を降りることとした。雪が崩れやすく、地藏尾根の最初の部分は気が抜けなかった。傾斜が緩んでからはシリセードを交えて雪と戯れながら下降。30分程で行者小屋についてしまった。

赤岳・横岳、阿弥陀南稜、天狗尾根、阿弥陀北稜、北八ヶ岳縦走。八ヶ岳山域の全貌が描けるようになってきた。残るは硫黄岳から天狗岳、蓼科山だ。

お知らせ①

メーリングリストのご紹介

無名山塾の本科、研究生、同人、講師の連絡用にsanjc2004メーリングリストが運営されています。現在、本科生7人、研究生11人、同人2人、講師3人が登録しています。登録がまだお済みでない方は是非登録の申し込みを下記アドレスまでお願いします。

sanjc2004@yahoo.co.jp

【行程】

赤岳鉱泉(6:30)～赤岩の頭(8:10)～硫黄岳(8:35)～台座の頭(9:30)～奥の院(10:05)～三叉峰(10:30)～地藏仏(12:00)～行者小屋(12:30)～赤岳鉱泉(13:00)

「」 3月27日(土)～28日(日) 「」

マスターステップ／赤岳主稜・阿弥陀岳北稜

「」

◆メンバー：新保司(講師)、日浅尚子

◆記録：日浅尚子

●赤岳主稜

【天候】快晴 午前7時赤岳鉱泉小屋入口で-6度 行者小屋テン場出発時は+5度位(?) 赤岳山頂は微風

【装備】45mロープ、補助ロープ(使用せず) シュリング長6本、短8本、カラビナ8枚×2 環付3枚×2 確保器(ATC)×2 目出帽 薄手ウール手袋とオーバーオーバー手袋 夏用CWX+極薄羽毛7分ズボン+オーバーズボン 厚手シャツ+メリノウールセーター+冬用ヤッケ

寒くて風が強い赤岳は軽い凍傷も覚悟で、と聞いていたが、講師の新保さんを待つ間、行者小屋前でテント設営をしていると、汗がにじむ。濃いブルーの空が美しい。絶好の天気にも助けられて、持てる力を全部出し切った赤岳主稜だった。

ハーネスとアイゼンで文三郎道を進み、途中から左にトラバースして主稜に入るが、トラバース手前ですべての装備を身につけた。以後、ザックは下ろせないし、水、行動食も摂れないということで、カロリーメイトのゼリーで200カロリー補給。

ウールセーターを着込み、目出帽、オーバー手袋も身につける。急な雪壁を慎重にコテニューアスでトラバース(約60メートル)して1P取付へ。直径1メートルのチョックストーンがお出迎え。2

月上旬に通過したパーティーは雪が少なく岩の下をくぐったそうだが、今回はたっぷりの雪。残置のロープをお助けひもにしてやっとの思いで岩を乗り越え、先のチムニーをどうにか抜ける。初っ端からこずる。アイゼンと手袋でIV級チムニーはきついよなあ。暗雲たちこめる。空は快晴なのに。ピカピカのボルトが数箇所に打ってあって、リードする新保さんのプロテクションは3ヶ所だったと思う。

「とにかく手早く」と新保さんは厳しい。先週の谷川東尾根でロープワークがスムーズではない、と指摘されており、今回も緊張する。私が上がると新保さんはすぐにメインロープで私のセルフビレイを作り、その間に私は回収したギアを新保さんのギアラックにかけ、すぐに新保さんを確保する用意。これを無言で速やかに行い、最後に互いを確認して、新保さんは登り出す。岩の向こうには互いの声が届かないので、ロープがいっぱいになったらビレイを解除し、私が登る。P2、P3、P4と続くと、だいぶ呼吸が合ってきた。途中の岩場やミックス帯も、少しずつ慣れてきた。雪稜に出るとちよっとほっとして、せめてこういう所ではさっさと行こうと、歩みを早める。

ザイルを出した個所(9ピッチ)のうち、核心はP1とP7。P7は出だしの垂壁を越えると、さらに上部にはクラックがある。クラックに取り付くには右に回り込むが、岩が膨らんでいて、右足が届かない。進退きわまった、かと思ったが、なぜかいつもこういう時に、「もう一人の私」が登場する。左足をぎりぎり右に移動し、エイツツと右足を伸ばしたら、アイゼンのツアックがしっかり岩を捉えてくれた。しめた。あとはぐいぐいとクラックを這い上がった。

私たちのぴったり後を、女性二人のパーティーが追っており、彼女たちを待たせないように気を使ったが、ここのP7で彼女たちもかなりこずったようだった。P7を越すと、だいぶ気分が楽になりP8、P9を通過。最後はザイルをしまっ

お知らせ②

原稿の宛先

月刊岩小舎の原稿は、下記までお願いします。

講習山行⇒山野美香

自主山行⇒福田洋子

同人便り⇒坂口理子

今月の一言⇒横川秀樹

メールアドレスがわからない場合は、sanjc2004@yahoop.co.jp までお問い合わせ下さい。

て、雪稜に行く。先に頂上小屋が見える。友人と3人で秋に硫黄から縦走した赤岳を、今度はこうしてバリエーションから上がっている。嬉しいのと同時に、何となく不思議な気持ちになった。登頂は午後3時15分。凍傷どころか日焼けが気になる好天で、山頂では随分と長居をし、文三郎道から引き返した。

今回は、プロテクションやビレー個所の判断は新保さんまかせだった。せめて、どういう所で新保さんはビレイするのか、よく観察しておいた。後続の女性パーティーは、その点の判断が甘く、適切な個所でビレイできなく困っていたようだった。早めにピッチを切ったほうがよさそうだ。昨年、支点整備が行われ、真新しいボルトが要所にあつたが、新保さんは岩角なども利用していた。この場合、長いシュリングが役に立つから、多めに持参した方がいい。また、天候が悪い場合(風、低温)、目出帽は厚めのものを、上着もさらに一枚追加する必要がある。

27日は前に男性二人のパーティーがいて、同じ時間帯に登ったのは合計6人だったが、翌日曜日午前は、20人以上の行列が出来ていたのが、阿弥陀北稜から見えた。渋滞となった場合、所要時間は大幅に増加するだろうから、寒さ対策がさらに重要になる。

【行程】

行者テン場(10:15)～1P取付(11:00)～2P(11:45)～3P(12:15)～4P(12:40)～(13:00)5P(13:20)(13:45)～6P(14:00)～7P(14:15)～8P(14:35)～9P(14:55)～最後の雪壁(15:05)～赤岳頂上小屋(15:15)

●28日阿弥陀北陵

装備も、行程も、赤岳主稜の3分の1から、4分の1という感じ。あっという間に終わってしまった。ロープは岩峰通過時のみ。雪稜は先頭を歩かせてもらった。ただ、それもこれも天候が良かったからで、後日、田中講師によると「下降時の中岳沢の状態が悪く雪崩の危険があり、北陵を懸垂で降りてきたこともあるんですよ」とのこと。難なくできて、別の時には全く違う状況になってしまうのが、冬山。またこの日、阿弥陀から中岳沢コル方面に下山していた女性二人組の一人が、60メートル滑落した。そばに居合わせたガイドが救助した。幸い怪我はなかったそう。危険はいつもそこにある。

昨年のチェアキャンプ前日の小川山ルート講習(小川山セレクション)以来、お世話になった新保さんの最後の講習ということで、参加した。前週の谷川・東尾根から数えて、この冬3本のアルパインクライミングに挑戦できた。講師(ガイド)に連れて行ってもらったのでは登ったことにならない、という指摘もあるだろうが、アルパインクライミングの勉強をほとんどしておらず、アイスクライミングの経験とささやかな冬山縦走だけでは、まだまだ自主を企画する力量はない。アルパインクライミングのルートを自主でこなせるように、勉強していきたい。

【行程】

行者小屋(6:45)～ジャンクションピーク(7:15)～第一岩峰(7:30)～第二岩峰(8:30)～阿弥陀岳(9:00)

お知らせ③

無名山塾・本科(登山学校)のご案内

無名山塾・本科は自立した登山者の育成を目的とし、2年間で岩・沢・雪の基礎的な技術(48単位)を取得して頂きます。入会申し込み、お問い合わせは、無名山塾事務局まで電話、FAX、ハガキ、Eメールで。

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 1-39-2-1F

TEL:03-3941-3481(平日 10時-18時) FAX:03-3941-3482

メール:ZUA11617@nifty.com

入会金:10,000円、年会費:12,000円

山岳保険料:8,000円(4/1～3/31)

「」 3月27日(土)～28日(日) 「」

基本ステップ／赤岳

「」

◆メンバー：工藤寿人、阿出川忍、斉藤典子、黒田記代、浅村和史、宮下卓宏、伊藤栄子、シニア1名

◆記録：伊藤栄子

3月28日、ゆっくりペースで沢沿いに奥に入っていくと、大同心、小同心が目の前に現れた。

周りを雪で覆われていると岩稜の突き出た表情が良く見える。大同心下部付近には青氷もきれいに現れて、八ヶ岳に入ってきたことを感じさせられた。14:00 赤岳鉱泉着。

3月28日、快晴4:30起床、6:00 出発の予定だったが多人数の食事準備は思っていた以上の時間を費やし、6:30 発となる。30分程で大同心を目の前にし行者小屋に向かい、アイゼンを着け文三郎尾根に入っていく。

ここからの登りはたいへん辛いもので撤退を思う、がメンバーの励ましで8:45 阿弥陀分岐、9:45 赤岳山頂に立つことが出来、休憩をた

ぷり取りながら、12:20 赤岳鉱泉に戻ってきた。この時期にしては、雪積状態も良く雪山らしさを味わうことがた山行となった。

【行程】

3月27日

八ヶ岳山荘(10:10)～美濃戸山荘(11:10)～赤岳鉱泉(14:00)

3月28日

赤岳鉱泉(6:30)～赤岳(9:45)～赤岳鉱泉(12:20)

■講習山行の記録

「」 3月6日(土) 「」

応用ステップ／下権現堂山／山スキー

「」

◆メンバー：工藤寿人(講師)、伊藤幸雄、横川秀樹、遠足倶楽部3名

◆記録：横川秀樹

朝8時40分、待ち合わせ場所の浦佐駅に全員が集まった。今夜の宿「治兵衛」の車が迎えに来てくれている。私の車は、治兵衛の車の後をついていき、30分ほどで目的地のアクシオムスキー場(跡地)に着く。このスキー場は2、3年前に閉鎖されたらしく、リフトの支柱だけが寂しげに立ち並んでいる。

駐車場はなさそう(雪に埋もれたまま?)なので、道路脇の歩道上に車を停める。小雨が降ったり止んだりするあいにくの天気の中、準備をして9時45分頃、出発。

元スキー場のシール登高は、序盤緩やかで、

それが少しずつ斜度を増していく。とは言え、十分に直登可能だが、講習なのでゲレンデ幅を一杯に使ってジグザグに登っていく。私と伊藤さんは、内心「なんでこんな緩い斜面をちんたら登らなきゃならないんだ、ブツブツ」と・・・、あつ、いや、めっそもないです、工藤さん。そんなことは全く考えず、シール登高の良い練習をしていくのだった。そうこうするうちに、風がどんどん強くなっていく。空を見上げると、雲の流れがとんでもなく速い。稜線に出る地点では、ちょうどそこがコルになっていて風の通り道となるため、凄まじい状況になってきた。この日、新

潟市では風速 28mを記録したということなので、おそらくここでも、それを上回るくらいの風が吹いていたのではないかと思う。

うまく風をよけられる場所を見つけ、そこでしばし休息。i-mode で予報天気図をチェックするが、到底回復は見込めないので、ここで引き返すことにする。時間は 11 時を少し回ったぐらいだった。

さて、問題の下り。見た目は、ゲレンデそのものだが、圧雪されていないので、雪面から足裏へと押される力が常に変化する。整地されたバーンなら華麗なカービングターンを披露できるところだが、まだまだこういう状態には慣れていないので、体がついていかない。スキー板の中心に乗らなければという意識と、頭から前へつんのめりそうな恐怖心の板ばさみで、結局、後傾になってしまう。そのため、ドテっと何度も倒れてしまった。

しかし、転んでも面白いのがスキーのいいところだ。滑っては悲鳴をあげ、転倒しては大笑

い。その繰り返しで下まで辿り着く。所要時間は 20 分ぐらいだったろうか。

早く終わらずでしたので、一旦宿に入ったあと、全員で須原スキー場へ向う。午後券を買って、3~4時間ほど滑って一日を終えた。(翌日の守門岳は大雪のため講習中止)

【行程】

アクシオムスキー場跡地(9:45)~稜線 (11:00)
~滑降開始(11:20)~アクシオムスキー場(11:45)



||||| 3月6日(土)~7日 |||

基本ステップ／谷川岳天神尾根~雪洞

|||||

- ◆メンバー:小林英男(講師)、岩本一郎、伊藤栄子、阿出川忍、田中治男、斉藤典子
- ◆記録 : 斉藤典子

小雪が降っていたが風はそれほど強くない、天神尾根までラッセルを楽しむ。12 時前より雪洞作業開始。雪をかき出す手順は、シートを敷きつめ掘り出した雪を乗せ溜まれば坂を転がして捨てて行く。スノーソーでブロックを切り出す作業は夢中になっておもしろい。二人入り、三人入りと、中に進むほど雪は硬くなり穴が広がって行くまでが長かった。6人が楽々過ごせる雪洞は午後4時過ぎに完成。脇には栄子さん作成のトイレも立派である。

初めての雪洞体験だが、想像していた以上に静かで暖か~い。ロウソクの灯りはとても落ち着く。入り口のカバーは岩本さんが作ってくれたおかげで雪の吹き込みもほとんどなく快適に一夜を過ごす。

3月7日(日)、あまりに過ごし安かったせいか起床時間1時間オーバーで7時出発。夜中にしんと降った雪が30cm以上積もり、入り口横の階段をすっかり埋め尽くしていた。

行動中雪は降り続いたがほとんど風がないせいか寒くない。視界は悪く彼方にそびえ立つ尾根がボーッと見える。時折吹く強風には立ち止まり顔をそむけてやり過ごす。細い鉄柱の脇に立つとそこは熊穴沢避難小屋。雪崩の危険もあり「ここまで」となった。

引き返す途中小高い丘に見える“空き家”を這いつくばって覗き込む、これがイグルーだった。トレースのすぐ横にあるため時間が経ち解けはじめた時、人が乗り上げ崩壊する恐れがあるので壊しておく方がよい、と小林講師が実行されていました。

帰りは時間もあつたので尾根のどこを掘ればよいか?と質問があり、風向きとセップの張り出した方向、そこから下へ雪洞までスコップで掃くように道を付け掘り出し方を復習する(とても疲れしました)。ロープウェイで午後 12 時すぎに下山。

【行程】
3月6日(土)
JR 上越線水上駅改札口 9:45 集合～バス～ロープウェイ～天神平～天神尾根雪洞設営(12:00)
3月7日(日)
雪洞(7:00)～熊穴沢避難小屋(8:30)～下山

「」 3月13日(土)～14日(日) 「」

応用ステップ／谷川岳西黒尾根～雪洞

「」

- ◆メンバー：金沢和則(講師)、坂口理子、矢田実、茨木嘉道、伊藤幸雄、田口浩昭、日浅尚子、山野昭人、山野美香、横川秀樹、浅村和史、黒田記代
- ◆記録：浅村和史

林道を外れるとすぐ急登になり、尾根に出るまで続く。雪面が固かった。尾根に出たところでビーコンのチェック。チェックのために離れた金沢さん以外は全員探索モードにしたはずなのに、なぜかビーコンが鳴る。そのうち鳴り止むがなんだか不思議。ビーコン。金沢さん一人を探索モードにした時の個々のビーコンチェックはうまくいった。

山頂に着くまでは快適に登る。トレースはずつついており、快晴の下、頂上(トマの耳)付近以外風もほとんどない。南側を向くと天神平スキー場が眼下に見通せ、北側では東尾根上部の雪壁でどこかのパーティーがうごめいていた。ただ、頂上到着後 10 分もたつとガスがたちこめ、急に視程が短くなってしまった。以後天神尾根を下り始めるが、再び谷川岳山頂が見えることはなかった。

一部で今回の雪洞掘りを疑問視してみるなど不穏な空気が流れる中、熊穴沢避難小屋近く

に雪洞候補地点を見つける。掘るのは楽しい。スコップで掘ると一度に多くの雪を取り出せ、進捗を感じるし、スノーソーを使うと特に床面を平らにしやすい。穴の中においてその穴を広げてゆく、しかも上下左右前後のどこだつて掘れるという感覚もなかなか。

結局僕の泊まった 6 人用雪洞は 2 時間でできあがつた。

翌日は天神平まで降り、そこからロープウェイ。途中カモシカを見つけたりしたが、あつという間に土合口に到着した。

【行程】
3月13日
土合口(7:00)～谷川岳頂上(トマの耳)(12:30)～天神尾根雪洞掘り地点(13:30)～雪洞泊
3月14日
天神尾根下降開始(6:30)～天神平(8:00)～ロープウェイ～土合口(9:00)

「」 3月20日(土)～21日(日) 「」

マスターステップ／阿弥陀岳南稜

「」

- ◆メンバー：小林英男(講師)、松本善行、伊藤幸雄、福田洋子
- ◆記録：福田洋子

講習の3日前に個人装備の軽量化と共同装備の連絡をもらい、昨夜は荷物の入れ替え、差し替えを散々繰り返し、なんとか15～6キロにおさえた。

それでも茅野駅で講師のもとに集合して、再度の装備チェックを行い、不要な荷物をロッカーに預けタクシーにて舟山十字路へ向かう。

この所の陽気は八ヶ岳も例外ではないらしい、舟山十字路からの歩き出しでは日当たりの良さそうな所は地面がすっかり見えている。

旭小屋で休憩、いよいよ尾根に取り付く。しばらくはアイゼン無しで行動するが、足元の雪は高度を上げ更に氷化してきてアイゼンを付ける。立場山までの2時間は、トップを自分のペースで歩けたので余力を残して到着。

小林講師と松本さんは今夜の幕営適地を幾つか考えていたようだ。「 TENTを張る場合はスペース的に限りがある、他に2ヶ所ぐらい考えられるが早い者勝ちになる」との事。他のパーティーがこの日も4組ぐらい来ていたが2人組はツェルト、6人位のパーティーも小さいテント2張りにしていたようだ。

夜半まで小雪がちらついていたが、ほとんど積もることなく翌朝は晴天。絶好の登攀日和。重かった食料や飲み物も昨夜のうちに片付きザックはさらに軽量化。

青ナギ、無名峰と展望を楽しみつつ通過。P1・P2の岩場もハッキリとした自覚の無いままに通過した。P3手前で小休憩、これからが今

日のコースの核心部だと思つと身中穏やかでないが、とにかく行くしかないと覚悟を決める。

岩の左を巻いて行くと問題の「樋」が出現、既に取り付いている先行のパーティーが終わっていない。残置の新しいロープが雪の上にすっかり出ていて私達もこれを使わしてもらおうべくカラビナ・スリングをセット。「樋」は雪がたっぶり着いていて一足一足を確実に止めて登る。早く通過したくて気が急いでいるせいか、思ったよりルートが長く感じられた。

私達のルートの右手では、あえて残置ロープを使わず、自分たちのロープで途中の灌木に支点を取り登る三人組もいたが、こちらの3倍以上の時間が掛りそうだ。

核心部を終えた稜線で小休憩、深呼吸し心拍数を整え立ちあがる。もう一度、気を引き締め直して最後のP4のトラバースに進む。一度、緊張の糸を切った者としては、ちょっと嫌らしいトラバースだが、そこを終えて岩を巻き直上すると今まで遮られていた北八ヶ岳を含む360度の展望が一気に広がった。

しばし展望を楽しんでいると、私達の登って来た反対側からサブザックの登攀者達が次々と上がってくる。私と伊藤さんが来週に予定している北稜の登攀者達だ。

小林講師と松本さんに北稜のポイント、また今日は晴れているからルートが判るが、悪天時の下降路の取り方、雪崩れの起きやすい所、北稜の取り付きなどを行者小屋に下りながら教わ

今月のTIPS (No.1) ～雪崩対策～

雪崩ベコン、ゾンデ(プローブ)、スコップは個人装備が当たり前という意識が高まってきました。でも、それだけで大丈夫でしょうか。今月のTIPSでは、雪崩があったとき、少しでも生き残る確率を高めるために、以下の3点について考えてみます。

- ①肩掛け式のピッケルシメントは使わない。
- ②ヤッケの上下は、必ず着用する。
- ③ザックのベルト(胸と腰を外して)行動する。

①は、最近雪崩対策の研修会で指摘されている点です。雪崩に襲われたとき、ピッケルがアンカーの役を果たし、デブリの下のほうに埋まる可能性が高くなる、というのが理由です。リストシメント式であれば、手首から抜けるのでOKということですが、危険地帯に入ったら、リストシメントも緩めにしておいたほうが良いでしょう。

②は、言うまでもなく低体温症予防のためです。天気の良い日は、2～3月でも日中相当暑くなる日がありますが、そんなときでもヤッケを脱ぐ前に、ちょっと自分いるエリアのこと(雪崩起こりうる場所 どうか)を考えてみましょう。万一雪崩に遭ったら、ヤッケの着用が生と死の分岐点となることは十分考えられます。

③は、①と同じような理由です。雪崩に流されたときは、雪の中を泳ぐようにして、なるべく上向きに行動する必要があります。その際、ザックが邪魔になるので、ベルトを外しておき、雪崩に遭ったらすぐにザックを捨てられる態勢にすることが重要です。ルート的大部分がナイブリッジや急な雪壁のような山行では、最初から最後までベルトをせずついて行動したほうがよいかもしれません。

(研究生・横川)

った。

今回の山行で一番ポイントとなるのは、やはり荷物の軽量化だったと思う。特にベースを置かない全荷物を持ったまま移動するバリエーションでは、絶対に持っていないてはいけない物、なくても代用出来る物、共同にして減らせる物など回を重ねる度に考えさせられる。そして荷物が軽ければそれだけ行動は早く、バランス良く、体力も消耗が少なく岩場やトラバースでの危険を回避は出来るだろう。でも持っていなかった事によるリスク(危機管理&後悔&我慢忍耐)を今後の自分が計画する山行の場合、どこまで考えて判断するか難しい。

本科生としての最後の講習は頼もしい男性陣に守られて、経験も体力もまだまだ足りない事を実感するものだった。(でも楽しかったよ！)

【行程】

1日目 曇りのち小雪 舟山十字路(10:50) ~ 旭小屋(12:00)~立場山 14:00 テント泊
2日目 晴天 立場山(7:00)~無名峰(9:00)~ P3(9:45)~阿弥陀岳(10:45)~行者小屋(11:30)~美濃戸口バス停(13:00)

「」 3月20日(土)~21日(日) 「」

マスターステップ／谷川岳東尾根

◆メンバー：新保司(講師)、横川秀樹、日浅尚子、黒田記代

◆記録：黒田記代

曇り空の出発。一ノ倉沢出合まで林道を歩く。ところどころアスファルト道路が出ているが、雪道で所々凍っていた。

一ノ倉沢出合でアイゼン・ハーネスを装着し、一ノ沢からシンセンの科尔へ向う。一ノ沢は深くて細くて急な谷で、上部はかなりの急傾斜でした。雪も舞い始め、重苦しい雰囲気になってきた。ここでは、雪崩の危険性があるので、シンセンの科尔まで休めない。シンセンの科尔で登攀の準備。これより先、ザックは下ろせないで、行動食もポケットに入れる。

トップの新保さんと2番手の横川さんがロープで結ばれ、さらに横川さんが別のロープ2本をつなぎ、3番手の日浅さんと黒田と結ぶ。新保さんが登りロープが一杯になったら、新保さんの確保で横川さんが登り、さらに横川さんにつながれた2本のロープが一杯になったら、横川さんの確保で日浅さんと黒田がほぼ同時に登る。日浅さんと黒田が登っている間に、新保さんは次の支点まで移動し、横川さんの確保支点を構築。こんな段取りで、終始ダブルアックス(縦走用1本とアイス用1本)で行動した。

支点は岩、枝、スノーバー。雪稜・雪壁上では、スタンディングアックスビレーを行う。今回は、第二岩峰、第一岩峰とも巻き、雪稜・雪壁の登

りとトラバースの繰り返しであった。東尾根が初心者の入門コースになっているのは、「岩壁」をエスケープ出来るからだそうです。何組か先行パーティーがあり、トレースがしっかりあったので助けられた所も多かった。後続パーティーがいなかったため、自分達のペースであせることなく登れたのもよかった。

足を踏み外せば一ノ倉沢にまっさかさまへのトラバースなど、視界が良ければ相当にびびったでしょうけど、あいにく視界が悪く下が見えなかったため、運が良かったのか？怖くなかった。小雪がちらつく程度で、風もほとんど無く、寒くなかったのも幸いでした。

西黒尾根の下降が夜になってしまい、周りがよく見えないこともあり、それなりに危なかった。先週登った時とは雪の状態がかなり変わっていた。ピバークの用意はしていましたが、出来たら1日で終了したいとの新保講師の考えで、真夜中の下山となりました。

明日、天気が崩れたら下山出来なくなる事を考えてのことです。長時間行動もあって、私だけ西黒尾根の下降でバテてしまいました。指導センターに戻り、駐車場の6階の床で寝ました。床暖房が効いていて熱いくらいでした。

【行程】
 指導センター(6:45)～一ノ倉沢出(7:45/8:15)
 ～一ノ沢出合～シンセンのコル(10:45/11:00)
 ～オキの耳(17:45)～肩の広場分岐点(18:15)
 ～西黒尾根～指導センター(22:30)

■ 同人便り ～矢田 実～

『岩小舎9はパソコンが無い～ん！？』

西黒尾根で思いついた「親父ギャグ」を強引にタイトルにしてしまいました。さて、4月からの「C-UP ワールド」改め「月刊 岩小舎」新編集長の山野美香さんより、創刊記念号の「同人便り」の中で、過去にあった岩小舎に絡めた内容を掲載したいとの原稿依頼があり、なぜか小生に声がかかりました。

「岩小舎」とは、無名山塾の会報のことで、二つの形式が存在します。いや存在していたといった方が正しいでしょうか。ひとつは、昔ながらの冊子(会報)、もうひとつはインターネットを利用した「岩小舎9」です。冊子の方は、事務所に保管されているので興味のある方はご覧になってください。小生も冊子にはかかわったことが無いの、ここでは 幻の「岩小舎9」に触れてみたいと思います。

「岩小舎9」は山塾の M 講師が音頭をとり、ニフティーサーブの個人用フォーラム「PATIO」に展開した無名山塾の電子会報でした。「読み書きパソコン」を売りに、時代を先

取りした企画でしたが、当時はパソコンが高価だったこと、利用にはニフティーサーブへの入会が必要などの制約が多く、残念ながら普及しませんでした。

掲載内容は、岩崎代表の「無名山塾のこと」「安心登山がトレンド」「山のとっぺんで自分に帰ろう」などの寄稿文、会員の方々の山行報告、講習会の感想、御大 MS 講師の「シール歩行技術のポイント」・「雪崩対策メモ」などの技術レポート、救助訓練のレジメ、H 講師の机上講習会の資料「マルチピッチ論」、山の雑学ノートなど約 100 件が掲載されていました。小生も M 講師経由で、「西岳～編笠山ラッセル山行」などの記録を掲載した記憶があります。

現在、旧 HP の残骸？岩崎元郎文書集のページ

(<http://village.infoweb.ne.jp/~sanj/iwasaaki.html>) からリンクが張られていますが、私はニフティーの会員ではないので状況が確認できません。ニフティーをご利用の方ご協力いただけませんか。会員の皆さんの大切な記録をもう一度整理・公開したいと思います。無名山塾の HP も整備され、パソコンとインターネットが普及した今ならきっと……

■ 自主山行の記録

「」 3月20日(土) 「」

巻機山／山スキー

「」

- ◆メンバー：坂口理子(L)、工藤寿人、金沢和則、岩本一郎、
- ◆記録：坂口理子

無風、快晴。最高の条件、最高のメンバー。なのに…何故、登れなかったのか？登山隊に

何が起こったのか？ 思わぬアクシデントか？ メンバー間の不和か！？ それとも……！？

7:00 過ぎ、清水集落のバス停を出発。いい天気だ。今日はきっと登れそうな気がする。シールをつけて、意気揚々とスキーで林道を進む。しばらくしてショートカットするためトレースをはずれ右ヘルートをとる。しかし、これが地獄の 1 丁目だとはこの時誰も知る由はなかった。雪もいい、景色もいい、気分は上々！ 金沢さんは先頭で黙々と(= 楽しそうに) ラッセル、工藤さんは開放感を満喫し、坂口はお喋り三昧。子カモシカの凄惨な殺害現場(熊の足跡多数!)を見学したりして大いに盛り上がる。しかし、このとき既に取り返しのつかない事態になっているとは、誰も知る由は……いや、岩本さんだけは、少し不安に思っていたか。沢沿いにしばらく進んでいくと、金沢さんの足がとまった。「橋が出てこないんだけど」「えー？」「うそー」ウソもクソもない。地図もコンパスもこの時はじめて見たのだから。よくよく見ればルートを決めた 2 つ分ほど(!)ずれてしまったらしい。だが、とりあえずこのままつめて、渡れそうなどころで沢を渡ろうということになった。……かなりハイテンションだったのだ。皆、沢なんか余裕で越せる高揚感に支配されていた。……いや、岩本さんだけは、少し不安に思っていたか。ともあれ、進む一行。最初の沢はすんなり越せた。ところが次の沢は思った以上に深くえぐれ、越せそうにない。目標の尾根は、その次の米子沢を越えてさらに向こうだ。ようや

つと平常心を取り戻した面々、戻ろうか、ということになる。決まれば早い。自分達のトレースを追ってあつと言う間にルートはずしたところまで戻ってきた。が、時間は無情にも過ぎ、既に 11 時を回っている。もう登頂はタイムアウトだが、行けるところまで行こうということになる。「井戸の壁」という急斜面を、しつこくシール登行する。どうせ登頂できないんだからあせることはない。というわけで、坂口、キックターンの鬼となる。工藤さんの指導のもと、繰り返し折り返し、折り返し繰り返し……。 「井戸の壁」を抜けたところで、本日はここまで(本当はこの先からがオイシイ斜面なのだが)。密な樹林を思い思いにすり抜けて滑る。工藤さん・金沢さんは、小気味よいショートターン、岩本さんは優雅に中ターン、坂口は斜滑降のままターンのきっかけを失いキックターン。わずか 20 分ほどで滑り降りたが、いかんとも去りがたく、その場で 30 分程立ち話。近所のおばちゃん状態だ。雪が舞ってきたのでようやく林道へ向かった。車に戻ったのは 14 時半くらいだったか。既にそのころには、頭の中は今夜の民宿での酒をどこで仕入れるかでいっぱいになっていた。……何故、登れなかったのか？ ……それは、楽しすぎたからです。教訓:①いくら楽しくても地図とコンパスはきちんと見ましょう。教訓:②いくら楽しくても間違えたと思ったら戻りましょう。

「」 3月28日(日) 「」

平標山と仙ノ倉山スキー登山

- ◆メンバー : 岩本一郎(L)、小松清隆
- ◆記録 : 岩本一郎

(天気 晴れ)

スキー登山として平標山は一般的であるが、仙ノ倉まで行くことは比較的少ないので仙ノ倉山を目指した。

元橋から平標山まではどこでも登れる感じであるが、傾斜がゆるく樹林のすいているところを登下降したい。昨日の苗場スキー場からの双眼鏡観察により、しばらくヤカイ沢左岸を上り、右

からおりてくる支尾根の裏側に回りこんで登ることにした。

朝のうちは雪面が固く、スリップするのでスキーアイゼンをつける。1400mをすぎたら適当なところでトラバース気味に尾根の腹にとりつく。尾根上に出るまでが急であるが、登りやすい雪で問題なく登れた。

尾根上は雪庇が出ており、そのほうが木がな

いので歩きやすい。基本的にはシールで登り、狭く急なところは階段登高で登る。やがて平標小屋の屋根が下に見えて主稜線に合流した。その後、特徴のない広い稜線を詰め、平標山の山頂に到着した。山頂は結構にぎわっている。

さらに仙ノ倉山を目指す。いったんシールをはずしてコルまで滑った。思いのほか滑り良い雪質で思わず歓声があがる。まっさらな雪面を気分よく滑る。やめられませんな。コルから仙ノ倉山までは雪付きが悪く、笹などが出ているが、スキーでも行動できる。仙ノ倉までは小突起がいくつかあり、巻ける所は巻いたが、最後の小突起でスキーはデポした。

一部木道が露出した稜線をたどって待望の仙ノ倉の山頂へ。今回のルートに難しさはないとはいえ、谷川連峰の最高峰だ。やはりうれしい。時刻も遅めであったためか誰もいなかった。僕らも、雪が固くなる前に下降したいと、あわただしいが下山にかかる。基本的には往路を戻るのであるが、平標の山頂は1900mくらいのところを巻いてしまうつもりだ。しばらくは、スキーを履いて歩き下る感じ。さて平標の下の鞍部から

の大トラバースである。思っていたより長いトラバースだったが、うまい具合に登った尾根の下降点に到着した。尾根にのり雪庇状の上を慎重に滑り、高度を落とす。とばせないが楽しい下降だ。さらに尾根から沢へ林間の急降下である。表面3センチほどの雪が板状にはがれ、やや不安定だが、問題なく滑り、沢床まで下降した。あとは沢に沿ってのんびり下った。

あくまでも明るい春山を満喫した。

スキー行動に無理のない山容で、楽しいスキー登山でした。さらに仙ノ倉山を越えて、シッケイ沢から毛渡沢を下り、土樽へ抜けることも可能です。ただしこの日の毛渡沢は水流が出ていたそうなので、ある程度のリスクを共有できるパーティーで臨みたい。

【行程】

元橋登山(7:40)～平標山(11:40～12:05)～仙ノ倉山(13:05～13:15)～元橋登山口(15:30)

■こちら技術委員会～講師/金沢和則～

『最近の技術委員会』

新たに研究生が増えたきょうこの頃。
技術委員会にも新風が！？

最近になって表に出てきた技術委員会。
「技術委員会？何だそりゃ。山岳会でもない無名山塾に」 そんなことが頭に浮かんでしまう人もいるかも？！

中心となる構成メンバーは研究生・同人・講師。
本科生もオブザーバーとして関わることもできる。

<じゃ、その中の技術オタクの集団？>

「えっ、口が悪いな、そうじゃなくて・・・技術委員会の目的は、基本のおよび総合的な登山力の構築・各自の生活における登山スタイルや各自の登山テーマの発見・登山技術など、人への伝達術・その他、登山に関わる「技術」の向上

や熟成を目指し、安心登山の推進に寄与する場とする・・・」

<わからないな～？>

「ま、登山本科卒業後にできる山を表現するイメージ・リーダーかな(少しカッコよく言い過ぎ)、山塾に残りつつも。そこでお互いにそんな山ができるようにとリスク管理も自分たちで微力でも考えていく場であるし、山塾で自主研修登山をするひとにおいては欠かせない場となると、でもただ自分が楽しいだけの自主山行だけしていてもダメなんだな。このあたりの味付けや風を読むところが大切などころでもある」

「あ、それとオープンな関係で山にいけることを築くことも大切なことのひとつかな。山行では各自の強い面、弱いこといろいろ持っているわけだけど、単純におんぶに抱っこだけの形でなく、それぞれを上手く活かして魅力ある山行をつくる。

サッカーでいえばフォワード、オフENSIB・ハーフ、ディFENSIB・ハーフ、ディFENSスそ

してキーパーとそれぞれ役割があるけど、その部分だけやっていたらゲームが進行するわけじゃなくて、空いたスペースへの走り込み、そのカバーやバックラインの攻撃参加やフォワードのディフェンスなどなど、役割もこなしつつ状況に応じての行動・・・その結果、素敵な山行

が・・・」

<話が霧の中だ!?増々わからない・・・>

と前途は多難?!などところもありますが、技術委員会での企画山行や、個人の山においてもより楽しく充実した場にしていきましょう。

■□■□ 編集室だより ■□■□

「月刊 岩小舎」編集長の山野美香です。

皆様のご協力を頂きまして無事発行できましたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。お仕事・家庭そして山・・・多忙な日々の中で原稿を書くのは大変な作業だと思います。しかし、このような形で記録を残す事は、自分自身にとって、そして無名山塾にとって大きな意味を持つと確信しております。

いつの日か、みんなで「岩小舎」を読み返しながら懐かしんだり、成長したお互いを確認し合いながら一献・・・そんな時を迎えられますように。

～*～*～* 4月の一言集 ～*～*～*

◆あ～仕事を辞めたい。山関係の職に就きたいと思うこの頃です。(たぐち)

◆この冬、ツアーブーツばかり履いてたので、2月末の八海山は新鮮で楽しかった。守門岳は、行ってみたい山だったのに中止で残念。浅草岳に期待!(久野)

◆カレーに牛丼、ラーメン、ポテト、ついついビールも飲んじゃったりして・・・、ゲレ食は太りますね。反省します。(理子)

◆来る4月24日は岩の技術確認の集い。基礎の徹底からちょっとハイレベル?のことで。研究生のさらなるレベルアップを目指します。(横川)

◆3月は初体験月間でした。冬期バリエーション入門

の阿弥陀北稜と石尊稜、そしてテレマークスキーもやっちゃいました。やる事が多くて困る。(幸雄)

◆谷川岳天神尾根で初めての雪洞泊。これまた初めて積雪期に赤岳登頂をして、阿弥陀北稜、赤岳主稜をじっくりと目の当たりにした・・・うん、いいな。(斉藤)

◆赤岳鉱泉で初めての食当。「主婦の性」というものでしょうか、1円でも安い食材を求めて、店を走り回ってしまいました。(阿出川)

◆怖がるから怖いんだ。怖がるから危ないんだ。谷川岳東尾根で学びました。岩をガリガリ登った赤岳主稜。景色に見とれた阿弥陀北稜。新保講師、ありがとうございました。(日浅)

◆盛り上がる山塾スキー部。忙しくてゲレンデに行けない私は街中で歩くだけ。そう、スキーは下に落ちるもの、体重移動と同じ。歩きからも上達への道が見つかるかな?!(笑)(KANA)

◆卒業山行での八ヶ岳。覚えた技術を多々発揮。でも雪は明らかにこれまで踏んできた雪とは違っていた。雪崩や滑落を2年間で最も身近に感じた山行となった。(昭人)

◆寄る年波には勝てない。でも、登攀ギアの数は減らせない。ああ、チタン製で軽量化を考える年に。トホホ・・・。(Kuroda)

◆ウ～ン、ウ～ン、あんなに楽しかった事なのに、あんなに辛かった事なのに、あんなに感動した事なのに。なのになのに書けないんだよね、「山行報告」。ゴメンもうちょっと待って・・・。(福田)

■3月の山行一覧

	種類	場所	日程	メンバー	記録
1	講習	谷川岳天神尾根/雪洞	3/6-7	小林,岩本,田中,伊藤栄,斉藤,阿出川	斉藤
2	講習	下権現堂山	3/6	工藤,横川,遠足3名	横川
3	講習	谷川岳西黒尾根/雪洞	3/13-14	金沢,坂口,矢田,山野昭,田口,山野美,伊藤幸,横川,日浅,浅村,シニア1名	浅村
4	自主	日和田山	3/14	福田,伊藤栄	—
5	講習	谷川岳東尾根	3/20	新保,横川,日浅,黒田	黒田
6	自主	巻機山/山スキー	3/20	坂口(L),岩本,工藤,金沢	坂口
7	講習	八ヶ岳 阿弥陀南稜	3/20-21	小林,松本,伊藤幸,福田	福田
8	講習	八ヶ岳 阿弥陀北稜	3/27	新保,日浅	日浅
9	講習	八ヶ岳 赤岳主稜	3/28	新保,日浅	日浅
10	講習	八ヶ岳 赤岳	3/27-28	工藤,阿出川,斉藤,伊藤栄,黒田,浅村,宮下,シニア1名	伊藤栄
11	自主	平標山・仙の倉山	3/28	岩本(L),小松(SL),渡部	岩本

◆技術委員会企画【八ヶ岳集中】

12	自主	阿弥陀北稜	3/27	伊藤幸(L),田口,山野昭,山野美	田口
13	自主	横岳石尊稜	3/28	伊藤幸(L),横川(SL),田口	伊藤
14	自主	硫黄～赤岳縦走	3/28	山野美(L),福田,山野昭	山野
15	自主	硫黄岳	3/28	沢口(L),坂口	—
16	自主	ツルネ東稜～硫黄岳	3/27-28	松本	松本

月刊 岩小舎 5月号の予定

(2004年5月15日発行)

【掲載予定】

□講習山行

冬山サバイバル訓練
芝倉沢・雪上訓練
大山川(沢登り)
鳥屋待沢(沢登り)
日和田(岩登り)
つづら岩(岩登り)
御嶽 長峰峠～御嶽
西黒尾根～谷川岳

□自主山行

二子山中央稜
上州保武尊スノーシュー

□技術委員会企画

天覧山(技術研修会)
藤坂ロックガーデン

☆原稿は5月5日締め切りです。

発行 無名山塾(埼玉県山岳連盟所属)

住所 東京都豊島区南大塚 1-39-2-1F

電話 03-3941-3481

FAX 03-3941-3482

HP <http://www.sanjc.com/>

編集長 山野美香

編集部 坂口理子

福田洋子

横川秀樹

□机上講座の予定(於:豊島区立勤労福祉会館)

4月22日(木)「沢登り入門」

5月27日(木)「夏山サバイバルと

セルフレスキュー」

6月24日(木)「ロープワーク」